

これ以上ないほどの歡喜の雄叫びを天子が上げたのは、里の大通りにある一軒の甘味処での事であった。

暫くぶらぶらと里を歩いていた僕らであったが、今言うまでもなく夏の真昼間だ。その熱気に、普段以上に急激に体力を持っていかれ、じゃあ何か冷たい物でも食べて休憩しよう、と互いの意思が同じ所に辿り着いたのは、至極当然の話であった。

そうして、偶々目についたこの店に入って、かき氷を注文したのである。

……それは良いのだが、  
「……食べ過ぎだ」

既に彼女の横に置かれた器は、既に五杯を超えていた。最近では紙同様、外の世界の恩恵で昔ほど夏の氷が貴重ではなくなったので、裕福な者でなくともこうし

て口にする事は出来るが……。

「何よ、もしかして財布の心配？ 器の小さい男はモテないわよ？」

「モテなくて結構。それに僕が心配してるのはそういう事じゃない」

まったく心配していないかといえば、また話は別だ  
けど。

「それじゃあ何よ？」

「腹を壊すぞ？」

「……………」

訝しげに問い返してきた天子に、そうきつぱりと答えてやると、彼女は怒っているとも呆れているとも取れる、何とも微妙な表情で僕の顔を見つめ返していた。

……何となく、馬鹿にされた気分だ。心配して言っ